

フェート(シェンシン)、アフナーシー・アフナーシエヴィチ

Фет(Шеншин), Афанасий Афанасьевич (1820-1892)

詩人。ロシアの地主貴族シェンシンとドイツ人女性シャルロッタの間に生まれ、オリョール県の領地で育つ。だが、両親の結婚はロシア国内では認められず、母の前夫の姓フェートを名乗ることとなったため、シェンシンの姓と貴族の身分の回復のために、尽力を続けることとなった。

モスクワ大学在学中に詩を発表するようになり、1840年に最初の詩集を刊行、雑誌『祖国雑記』にも寄稿した。1845年から1858年までは軍務についている。



1857年

1850年に2冊目の詩集が、56年には3冊目の詩集が刊行され、後者は大きな反響を呼んだ。この1850年代には詩人ネクラソフや作家ツルゲーネフなど雑誌『同時代人』の関係者と親交を深め、また57年には結婚している。

1860年にはムツェンスク郡にステパノフカの領地を得て、農業や家畜の飼育で成功を収めた。1861年の農奴解放、民主革命運動には批判的で、『雇傭労働に関するノート』(1862)や『村から』(1863-64, 68)といった評論集でその立場を明らかにしている。



1861年

1873年に姓シェンシンと貴族の権利を回復するも、愁いや孤独を感じるようになる。このころ、トルストイと親しくなり、詩にもその影響が見られる。

1877年、ステパノフカを売り、新たにヴォロビヨフカを購入。そこで詩作に励む。詩集『夕べの火』や回想録は読者や批評家の注目を集めた。またゲーテ『ファウスト』の翻訳、ショーペンハウエルの『意志と表象としての世界』の哲学的解釈、ローマ詩人たちの双書などでも高い評価を得る。自伝的な短編や中編も執筆している。



1890年、Ya.N.ポロンスキー、N. N. ストラホフ、フェート

フェートの詩は、自然と愛を主なテーマとし、一瞬のなかに永遠の美を映し出している。

初期の詩では具体的な現象に美が見出されていたが、50-60年代になると印象主義的な傾向が強まり、風景から得た印象や感覚や感情を表現するようになった。後にショーペンハウエルの影響を受けるようになり、80年代の詩には観念や本質への志向が見られる。

ロマンス歌曲の歌詞として愛されている作品も多い。